

生徒を古典に向き合わせるために

——多くの章段・記事を重ね読みする教材構成からの試み——

金子直樹

一 はじめに——生徒にとつての古典の読解——

国語の授業としての古典には、さまざまな「めあて」がある。授業の実際には、まず、文法や単語の習得という言語操作自体の重要性と、それに伴う困難さの問題がある。また、読解内容として、場面や人物関係というストーリー的な要素や、それらを統合する時代の論理や情緒も、もちろん正しく読み取らなければならない。さらに、現在の自分とは異なる状況や背景のもとに、自らを異質化し更新するという認識の過程も、自己拡充のためには有意義なものであると考える。私は、そのような「めあて」をもって授業を行なっている。

しかし、最大の「めあて」であるはずの「自らを異質化し更新する」ことが、なかなか難しい。せっかく文法や単語の習得という学習の基本を経てたどり着いても、叙述内容の読解に主眼を置いた、「もしも自分が『この場面』にいたら／『この人物』であつたら」と仮想する程度の読み方であれば、ただ現在の自分になぞらえているだけ

であつて、そこには異質も更新もない。古典の中の「この場面」や「この人物」については、手続手管を用いれば、どのようにでも魅力的に切実なものとして生徒に伝えることはできる。しかしその古典の授業が終われば、生徒は魔法が解けたように現実の世界に戻つていってしまう。時代を隔てた古典世界の叙述内容をひたすら読解するということでは、現代を生きる生徒にとつては、やはりいかにも必然性が低いという反省がある。古典を、それ自体の価値を前提として扱うのであれば、必然性などは問題にはならない。しかし「古典だから」という価値判断に頼っている限り、それはプラスマイナスの両極であり、結局は古典不要論に対抗できない。国語の学習としての古典では、生徒が言葉によつて思考する必然性を作り出すこと、生徒が思考せざるを得ない「問い」を立てることが求められる。

「問い」は、「答え」との対立・対応によつて成り立ち、その対立・対応が「思考」を促す。「答え」は固定化しているものばかりではなく、「思考」も対立の解決をのみ意味するものではない。どのような「問い」を立てるのかということは、「問い」と「答え」と

の間に、どのような対立・対応を見出すのかということである。私たちは日々の授業において、それを様々なレベルで設定しているのであるが、その「問い」の最終的な対象は、古典の叙述内容の読解ではなく、生徒自身である。「自らを異化し更新する」ということは、叙述内容を読解することによってではなく、自分自身を問うことによってなされるのだと思う。また、「問い」と「答え」との対立・対応から言えば、読み手である生徒自身と同レベルでの対立・対応関係にあるのは、叙述内容そのものではなく、語り手、作者である。古典を通して生徒が作者と向き合い、作者への「問い」が自分への「問い」となるように、授業を構築したい。

二 授業の概要

広島大学附属福山高等学校二〇〇五年度の高校2年生を対象に実施した、主教材として「枕草子」を取上げた実践から報告する。

「枕草子」の内容は一般的に、随想的章段、類聚的章段、日記的章段と分類・類型化されている。それぞれの類型がはっきりしているので授業で扱いやすくもあるが、「枕草子」全体の統一を求めようとする焦点が定まりにくくもある。そういう多様性を持った作品でもある。

実はこのような多様性・まとめにくい拡散性とも言えるものは、それらをどのように関連づけるのかという「問い」を含んでおり、授業を組み立てる上での大きな要素となりうるものであると考える。無論、国語の授業は研究者養成講座ではないので、専門的な内容や

考察に入り込むということではなく、また、反対に放念な読みをさせるものでもない。あくまでも正確な解釈に基づいた上での「問い」の設定であり、それは教材の選定や単元の構成によって妥当性が担保されるものであると考える。

この単元に関して言えば、「枕草子」類聚的章段などに表わされている作者清少納言の鋭い観察眼や人間性と、日記的章段などに見られる女房像との間に、何らかの関連あるいは断絶を見出そうとするのは、決定的外れではあるまい。「枕草子」において、類聚的章段と日記的章段との対比・対応関係から作者について考えるという枠組みを設定して、次のような構想で授業を計画した。

I 「枕草子」個々の章段やそれぞれの類型について、重ね合わせ比べることで、作品の特徴を明らかにする。また、対比・対応の軸を自ら発見して、作者としての清少納言について考える。

II 「枕草子」の内容に関して、異なる視点として「大鏡」・「栄花物語」を重ね合わせ比べることで、それぞれの特徴を明らかにする。また、対比・対応の軸を自ら発見して、「枕草子」の作者としての清少納言について考える。

III 「枕草子」内における対比、また、「大鏡」「栄花物語」との対比から、清少納言が表現しようとしたものを受け止め、清少納言の意図に答える。

取上げた主な教材は以下の通り。実施時間数は約三五時間で、二期から三期にかけて実施した。

「枕草子」から

すさまじきもの・ねたきもの・むとくなるもの

宮に初めて参りたる頃・大納言殿参り給ひて・中納言参り給ひて・閔白殿黒戸より・細殿にびんなき人・五月ばかり月も無う・二月つごもり頃に・大進生昌が家に

【大鏡】から

道長伝（冒頭部・伊周との競弓——学期教育実習）

【栄花物語】から

みはてぬ夢・浦々の別れ・とりべ野（道隆道兼死去、道長閔白就任、花山院襲撃、伊周隆家配流、定子死去）

三 授業の実際——生徒の「学習記録」から——

実際の授業をするにあたって心がけたのは、叙述内容を正確に読み取ることと、「問い」と「答え」との対応によって、生徒を作業者手と向き合わせることである。

授業の様子を、単元の流れに従って、生徒の「学習記録」の記述からの抜粋で示す。（※は金子による）

I 「枕草子」から、「問い」を発見する。

学習記録①「枕草子」「宮に初めて参りたるころ」

清少納言は、今まで学習してきた類聚的章段では、普通は人が話題にしないような聞こえの悪いものでも取上げたり、思うことを遠慮無くスケスケ言うタイプの女だと思っていたけれども、この日記的章段では何か雰囲気が違うようだ。今日読んだところでは、「恥づかし」「理無し」「目映し」などと自分の心情を表現し、初めての

宮仕えの緊張や混乱がよく伝わってくる。（中略）清少納言が、なんだか弱々しくて控えめな、コンプレックスのかたまりのような印象を受ける。

学習記録②「枕草子」「宮に初めて参りたるころ」

類聚的章段では評判の悪かった清少納言ですが、「宮に初めて参りたるころ」に入ってから、今のところ私の中では「恥づかしがり屋のおとなしい人」というイメージでした。今日読んでいて「さすが」と思ったのは、「いかで下りなむくさすがにゆかしきなめり」の部分です。どうにかしてこの場を離れてしまいたいと思いつながら好奇心を抑えることのできない清少納言自身の姿が描かれていて、ただろうし、こういう清少納言は類聚的章段でおなじみの姿でした。

※「枕草子」中の記事を比べ読みすることで「問い」を発見する、という過程である。「宮に初めて参りたる頃」は、清少納言が登場人物と語り手という二重の構造で表われてくる問題の章段である。そのような分析的なテーマは、それ自体を直接的に取り上げるのではなく、類聚的章段と重ね合わせる中で生徒自身が「問い」として見出すように仕向けることが重要であると考えらる。

学習記録③「枕草子」「中納言参り給ひて」

今回の文章では「枕草子」の新しい登場人物として中納言隆家が出てきました。ここでも扇のすばらしさをうまく表現できない隆家

に代わって、清少納言が横から気の利いたことを言つてあげる、というように、清少納言の教養の高さがよく表れています。同時に、そんな隆家の様子にイライラしてつい口出ししてしまったというのは、彼女の性格をよく表わしている所でもあると思います。

と、読んできて、文章の末尾に「「一つな落としそ」と言へばいかかはせむ」とある部分で、改めて今読んでいる文章が、「日記的章段」であるということに気づきました。時代背景の違いや定子や伊周などキャラクターがはっきりした人たちが出てくるために、まるで平安時代の宮中を舞台にした小説であるかのように、ついつい読んでしまいます。作者の描写・表現力が、そんな誤解をさせるほどに優れていた、ということなのでしょうか。

学習記録④「枕草子」「関白殿黒言より」

女房達にも気軽に声をかける道隆は、そこらへんにいるオヤジと一緒かと思つていたら、今日の内容で道隆のすごさが表れていた。清少納言は、二つの場面で道隆を評価している。一つめは、ごく私的な場面。道隆の沓を準備する伊周をほめ、その伊周に世話をされるということの結果的には道隆をほめている。その場のムードも、「いろいろの袖口して」という表現から、視覚的にも柔らかさ暖かさが伝わってくる描写だ。一方、公的な場面でも道隆は賛美されている。一つめのような柔らかい明るさではなく、白黒モノトーンの引き締まった色彩の中で、権力者道隆の堂々とした様子が描かれている。野心家でも実力もある道長を前にして、態度を変えず気合いだけで道長を負かしている。この前後する二つの場面は、内容は違いますが文章の構造は同じである。わざわざ二つ書いてあるのは、中関白

ファミリーの観察者である清少納言としては一つも書き漏らすわけにはいかない、ということなのだろうか。

※「中関白ファミリー」とは、「大納言殿参り給ひて」以下、道隆・伊周・隆家など人物に焦点を当てた章段を読み重ねる授業の中で定着してきた用語。このように登場人物など叙述内容に親しみを持つ一方で、先に生徒自らが獲得した「問い」の視点を用いて対象化して読むことを心がけた。

II「枕草子」を外から見て、「問い」を発見する。

学習記録⑤「栄花物語」「みはてぬ夢」

関白の地位を期待していた伊周だったが、実際に関白になったのは叔父道兼であった。しかし道兼は就任後わずか六日で亡くなった。再び好機のめぐつてきた伊周は、また期待した。しかしその期待は叔父道長によつてまたもや打ち砕かれた。それでもめげずに「さりとて」と思っている伊周は、ばかばかしいというよりも哀れにさえ思えてしまう。「枕草子」で、あの毒舌女の清少納言から絶賛されていた伊周なのに、「栄花物語」ではとてもさえない男のように描かれている。なぜ、清少納言は、こんな波瀾万丈のおもしろい内容を書かなかつたのか。

学習記録⑥「栄花物語」「とりへ野」

定子とその一族に対しては、清少納言のあの批評精神は働かなかったようである。平安時代の精神状況から考えると、清少納言は中関白家の没落を描くことは、定子の魂を冒瀆することであるかの

ように感じたのかもしれない。また、賢い彼女なら、自分の書いた『枕草子』が人々に読み継がれることを予測できたことだろう。世間では、皆、中閨白家の没落ばかりを騒いでいるなかであつて、中閨白家に仕えた者としては、自分にしかできない『栄花の記録』を残したかったのだろう。『枕草子』は、清少納言の願望の要素の色濃くある種のフィクションなのかもしれない。それが『大鏡』や『栄花物語』と大きく異なる点であり、魅力ではないかと思う。これだけ悲しい現実と直面した彼女は、何か絶対的なものの存在を求めていた。客観的な描写の『栄花物語』と比べて読むことで、清少納言の人間性が前よりも分かつたような気がする。

※ここで一端『枕草子』から離れて『栄花物語』にテキストを移行した。『栄花物語』独自の視点や自体的価値については、深入りはしなかつた。一学期に教育実習生の扱つた『大鏡』『南院の競射』と合わせて、『枕草子』の対象物としての扱いであり、『客観的描写の』という生徒の言葉は、その事情の表れである。ほかに、生徒の受け止め方として、

・『栄花物語』に中宮定子が描かれている場所があれば、ちよつと恐ろしい気もしますが、読んでみたいですよ。」

・「僕たちは定子を知っているから、授業（註、定子逝去の場面）が終わつたときには思わずほつとしてしまった。伊周や隆家にとつては、本当に涙がいくらあつても足りなかつただろう。しかし、冷静に考えると、中閨白家が没落してからは、定子の顔には死相が表れていたように思える。つまり必然的な死だつた

のだ。」

などの情緒的、物語の感想的内容が見られたが、これは少なくとも『枕草子』の叙述内容が定着した結果であると思われる。

Ⅲ『枕草子』の中に、「問い」を発見し、「答え」る。

学習記録⑦『枕草子』「五月ばかり月もなう」

毎日泣いて過ごしているはずの定子が登場した。「ああ、『枕草子』なんだ。」とほつとする。定子が「さることやありし」と尋ねると、清少納言はとほけて「何とも知らで侍りしを、行成の朝臣のとりなしたるにや侍らむ」と答えるあたり、たまには素直に「はいそうです」と言えよ、と突つ込みたくなるのは、『枕草子』にどつぶりどつかりすぎたせいだろうか。さて、その返答に対して定子は「うち笑ませ給」うのである。久しぶりに笑つた定子だが、あと何度こんな昔のようなやりとりが出てくるのだろうと思うと、なんだかすつきりと読み切れた感じがしなかつた。

学習記録⑧『枕草子』「二月つごもりころに」

「五月ばかり」と同様に、清少納言が中宮定子に代わつて機知教養を披露する話だ。これらのエピソードの構図は、『栄花物語』を読む前に学習した「宮に初めて参りたるころ」や『大納言殿参り給ひて』などと比較することができる。『枕草子』の中で、機知教養を発揮し華やかさを演出する役目が、中閨白家の衰退を境目として、定子や伊周の中閨白ファミリーから清少納言自身に移り変わつてきている。清少納言が『枕草子』をいつ書いたのか不明だが、定子の死後に書いたのだと仮定すれば、清少納言が大好きな中閨白家の衰退をふま

えた上で、それを全く感じさせない「書き方」をしているのだと思う。その当時の辛い空気の中で、かつての華やかさを取り戻そうとしてムードを盛り上げようと必死になっている登場人物清少納言の姿が、最後に「楽しい中関白家」を記録に留めようと冷静に筆を執っている作者清少納言の姿と同時に感じられる。「枕草子」学習も終わりに近づいてきて、自分の中ではだいぶ消化できるようになってきた。

※ここで再びテキストを『枕草子』に戻した。『枕草子』記事には年代が確定できないものもあるが、「五月ばかり月も無う」「二月つごもり頃に」「大進生昌が家に」は、道隆死去による中関白家没落後の出来事として位置づけて授業で取り扱った。学習記録⑦の生徒が「なんだかすっきりと読み切れた感じがしなかった」と言い、⑧の生徒が「自分の中ではだいぶ消化できるようにになってきた」と言っているのは、実は同じ事なのである。学習記録の記述からも明らかのように、⑦の生徒は叙述内容を理解した上での「問い」が立っていることを「すっきりと読み切れた感じがしない」という言葉で表現しているのである。それを「問い」が立ったという側から説明しているのが⑧の生徒である。

学習記録⑨「枕草子」「大進生昌が家に」

定子は泣いていてもおかしくない状況であるが、意外なことに笑っている（と記述されている）。清少納言が強引に、定子が笑う状

況を作りだしたのだが、私にはちよつと無理があるように思える。そもそもすごい勢いで転がり落ちてゆく中関白家を「楽しく」書こうとすること自体に、相当の無理がある。その無理を、清少納言が文才でもってどうねじ伏せてゆくのかわ、それを楽しみに読んでゆく。

学習記録⑩「枕草子」「大進生昌が家に」

清少納言は生昌に対してわざと突っかかるように皮肉めいた言い方をして笑いをとり、その場を和ませようとしているように感じる。さて、次はいよいよ当主生昌が出てきて、清少納言が、あの行成や公任と互角以上に渡り合った機知教養の持ち主だとも知らずに、戦おうとする場面である。清少納言が、いったいどんな機知教養をもって返答するのか、彼女の個人的な怒りも込められているだけに、楽しみなのは私だけではなく、平安時代当時の人々も面白く読んだに違いない。中関白家の没落が暗く悲しく書かれていた『栄花物語』に比べて、『枕草子』ではすこくテンポよく話が進んでゆきます。きつと、清少納言がすこく考えて書いたんだと思うと、彼女の健気さが伝わってきて、内容が作り話かどうかなんて気にならなくなってきました。

※この段階になると生徒たちは、自ら立てた「問い」によってもたらされた視点に基づいて、『枕草子』を読んでいる。テキストに見られる、清少納言の登場人物としてと語り手としての二重構造を理解して作品を対象化しており、また作者を相対化して捉えている点が、単元当初の「宮に初めて参りたる頃」での学

習からの深化である。

四 授業のまとめ―生徒の作文から―

単元のまとめとして、生徒が作者・語り手との向き合う姿勢を示した典型的なものを、生徒の提出したレポートから抜粋して示す。タイトルは生徒自身による。

生徒レポート①「書くことの哲学」

中関白家は清少納言の全てだったのだ。彼女も、中関白家の没落に涙したに違いない。しかし、彼女は常に笑っていなければならなかった。強がっていなければならなかった。「われはめ」と言われようと、中関白家を守らねばならなかった。機知機転は、世論と戦う唯一の武器だった。彼女にとつて、中関白家の名譽は自分の名譽。生きるも死ぬも一緒だったのだから。現に、定子の死後、彼女は華やかな宮中世界に姿を現わしていない。彼女にとつて、「書く」ということは、自分の全てをかけた、現実との戦いだったのかもしれない。中関白家の没落という現実とはかけ離れていようが構わずに、主観的で、こびへつらわず、他者に同情も求めない「枕草子」からは、彼女の強さとうかがい知ることができる。彼女にとつて「書く」ということは事実をつたえるための手段ではない。従つて、他者から評価される筋合いのものでもない。自分にとつての真実を表わすものであり、思うに、「生きる」というものもそういうものなのかもしれない。

生徒レポート②「枕草子」の言葉

現代の私たちは文字を使い、言葉を使う。時代の発展と共により便利により簡単に文字を言葉を使い、文章を作る機会が増えているけれども、一方ではチャットや掲示板のように、言葉を使い捨て商品のように次々と消費しているだけのような状況もある。わかりやすさを求める社会に迎合して、既成のものアレンジだけに止まっている気がする。一方、「枕草子」には、不遇の定子を元気づけよう、偶像化しようという強い意志がある。その意志によつて生み出された「枕草子」には、例えば「をかし」が表わす意味内容などに、言葉の可能性の広がりを感じる。これは清少納言の教養や機転もさることながら、彼女の強い意志や動機に基づいたものだと思ふ。

※右の二例以外にも多くの生徒が、古典の読解を古典の世界の中だけで完結させてしまうのではなく、書くこと表現することの意味や価値、現代の私たちの問題としての言葉のありようなど、生徒自身の問題にテーマを掲げて思考を深めていった。

五 おわりに―生徒の読みの更新をめざして―

今回の単元展開の中で、「読んで一番印象に残った・面白かった章段」を生徒に尋ねると、学年一〇二名中八三名が「大進生昌が家に」を挙げている。この章段は、他の日記的章段に比して、地味で陰翳ある章段である。4割以上もの生徒がこの章段を「印象に残った・面白かった」として選んでいるのは、後半のまとめ近くに扱ったために印象が鮮明であるから、ということではない。生徒の記した理

由から見ても、「枕草子」内における類聚的章段と日記的章段との対比や、「枕草子」と「大鏡」「栄花物語」との対比から、作者清少納言の意図を自分なりに受け止めており、ただ作品の叙述内容をトレースするという段階を越えた批評的な視点を持つて読んでいる。

単元構成、授業の目的としての、生徒が思考せざるを得ない「問い」を立て、その「問い」と「答え」との対応の中で、作者への「問い」が自らの「問い」となるという読みの出発点に立つことはできたのであるう、と考える。

(広島大学附属福山中高等学校)